2023 年 12 月 21 日発行

風車 Vol 10

「仁木町の風力発電を考える会」
編集部　　宮下　洋子

風車反対の「陳情書」が議会で継続審議却下！

★仁木から撤退―★銀山は除外

11 月１５日、関西電力によって、＜(仮称)古平･仁木･余市ウインドファーム事業(A 計画)＞から、仁木が外され、＜（仮称）古平・余市ウインドファーム事業（B 計画）＞として縮小した形で、新たに再出発することが発表されました。

ただし、「仁木町南部(銀山)については現在進める事業とは切り離し、別の風力発電事業として計画を再提出する」としました。

★12月16日:町民センターで、関電の説明会開催

仁木町は、＜A 計画＞から外れはしたものの、「配慮書」～次の段階に進み、「方法書」段階での説明会があるというので、行ってみました。

質疑応答は、あらかじめ質問用紙を配って記入したものを回収し、プロジェクターに質問内容を映しながら、関電が一方的に回答するもので、その回答に対して住民は、一切発言することや、反論することの出来ないものでした。

「後で質問時間を設けますから静かにして下さい」と言いながら、終了時間一杯まで、引き延ばし、

「時間が来たのでここで一旦閉会し、質問のある方は、後で個別に受け付けます」と言いながら、関電のスタッフが、あっという間に机と椅子を片づけてしまうので、住民の人たちもどんどん帰ってしまいました。巧妙な言論封じでした。

★嘘やごまかしの多い一方的な説明

嘘やごまかしの多い関電の一方的な説明や回答に対して、初めて来た住民は、信じてしまうかも知れないし、（それが関電のネライです）住民側に、反論の余地を与えないのは民主的ではありません。

北海道新聞

2023年（令和5年）12月17日（日曜日）

関電の風力計画
説明に不満の声

【仁木】関西電力は16日、計画中の風力発電事業「（仮称）古平・余市ウインドファーム」に関する初の住民説明会を町民センターで開いた。約120人が参加。関電側は計画を縮小し、風車建設予定地から仁木町エリアを外すことを表明したが、参加者からは「地域が納得できるよう真摯な態度を示してほしい」との声が続出した。

関電の担当者は従来計画を変更し、古平、余市両町にまたがる区域で最大出力7万5600㌔の発電所を開発すると説明。仁木、共和両町での風車建設は取りやめ、設置する風力発電機を64基から18基に減らす述べた。一方で、仁木町部を含むエリアで別の計を検討し、再提出すると た。

質疑応答は報道陣に非 開で行われた。参加者な によると、「環境への影 は」「別の計画はいつ提 するのか」などの質問が たが、具体的回答は示さ ず、70代女性は「関電が 合のいい質問に答えた け。全く納得できない」 不満をあらわにした。

説明会は事業計画や環 影響評価方法書の内容を 明するために実施。この は古平町でも開かれ、17 は余市町で開催される。

（伊藤圭三）

関電が主催し仁木町で開かれた風力発電の説明会

逆に言えば、関電は、本当のことを言っていないので、住民に質問されるのが怖いのです。

★策士（さくし）、策（さく）に溺（おぼ）れる

ところが、住民側は関電が考えるほど愚かではありませんでした。関電の策略に気づいた住民が怒りだして、あちらからも、こちらからもブーイングの大合唱で、会場が騒然となりました。普段物静かな銀山の人たちが、体を張って演壇の下にまで行って抗議したりしているのには驚きました。８５歳の老婦人が、最初から最後まで、詰め寄って、抗議の声を叫び続けて止めず、本当にビックリしました。

★町長は公用で出席せず

こんな重要な場面に町長が公用で出席がなく、「今日の説明会より重要な公用って何だろう」と、みな不信感を示す人たちも少なからずいました。

本会議で風車に関する一般質問

１２月２１日のAM９時から、本会議で、一期目の山内健生町会議員が、風車に関する一般質問を行う予定です。是非、少しでも多くの方の出席を！！

風力発電　地元の逆風やまず

関電　仁木説明会

「ゼロベース検討　信用できぬ」

後志地方の古平町などで風力発電所の建設を計画している関西電力は16日、住民を対象に説明会を開いた。地元などに反対の声が根強く、関電は計画を大幅に縮小する方針だ。計画地から外れた仁木町での説明会には多数の住民が詰めかけたが、関電側の説明に「信用できない」などと厳しい声が相次いだ。

後志地方で風力発電所を計画する関西電力が開いた地元住民への説明会＝いずれも16日、仁木町

仁木町の町民センターで午前10時から始まった説明会には約120人の町民が参加した。雪の降る中、事前に用意した100席を上回る住民たちが訪れ、風力発電所計画に対する関心の高さをうかがわせた。

関電側は計画の概要を説明し、「地球温暖化は異常気象をもたらす。二酸化炭素（CO_2）を減らすには再生可能エネルギーを増やす必要がある」と風力発電の意義を強調。その後、住民との質疑応答に移ったが、関電側は「住民のプライバシーに配慮する」と報道陣には非公開とした。

関電は昨年5月、古平と仁木、余市、共和の4町にまたがる約8500㌶の事業想定区域に最大64基、最大出力約26万8800㌔ワットの風力発電所をつくる計画を発表した。だが、想定区域内には保安林や手つかずの自然が残る山林が含まれ、日本自然保護協会などが事業の中止や抜本的な見直しを求めていた。

環境省も「国内で例が少ない大規模な事業」（環境相の意見書）として事業区域を絞り込み、地元の理解を得るように求めていた。慎重な対応を求める意見が強まる中、関電は11月21日、4町に広がっていた計画地を古平、余市の2町の約1400㌶に絞り、最大出力約7万5600㌔ワット、風車の数も最大18基と当初の3分の1ほどに縮小する、と発表した。

JR仁木駅前には風力発電所に反対するポスターが掲げられていた

ただ、関電は今回計画地から外れた仁木町の銀山地区で、別の風力発電事業ができないか可能性を探る方針だ。

約3時間に及んだ16日の説明会でもこの点に質問が集まった。「銀山エリアにつくらないでほしい」という声が住民から出たが、関電は「ゼロベースで検討する」と答えるにとどまったという。住民有志でつくる「仁木町の風力発電を考える会」の穂積豊仁代表は「関電はまだあきらめていないのでは。表面的な回答ばかりで信用できない」と関電の姿勢を批判した。

脱炭素社会に向け、関電は2050年に事業活動に伴うCO_2の排出ゼロをめざし、40年までに500万㌔ワットの再生可能エネルギーを新たに開発する目標を掲げている。

そのため関電は営業エリアの関西圏以外でも再エネの発電所をつくる計画を進めており、道内では昨年5月、後志や夕張市などで計4カ所の風力発電の開発計画を発表。そのうち伊達市や千歳市などで検討していた事業は、区域内にある国立公園の景観を損ねるとの指摘を受けて最終的には断念に追い込まれている。

後志地方の計画についての住民説明会は16日夕方に古平町で行われ、17日には余市町でも開かれる。

（編集委員・堀篭俊材）